新築移轉以來の文樂座

この書は、人形芝居の概論を極く、碎いて平易に、その舞臺に、床に親炙しない人にも、一通り、人形淨るりの概念を解かるやうにと、私は書いて來たのですが、序文にも述べた如く、舊稿を蒐めて順序を立てたのであるから、文樂座が御靈の地内にあり、或は御靈が燒けて、道頓堀の辨天座――昔の竹田の芝居に、假宅興行を續けてゐた時の現狀を、基調として、その「現在」に卽しつゝ、往古に遡りて概論の筆を進めて來ました。

ところで、今この書の校正を終つて見ると、文樂座は四つ橋々畔――詳しくいふと饅谷西の町、佐野屋橋南詰西へ入る、昔の近松座の敷地に新築、移轉して芝居小屋の面目を一新してゐます。

そして昭和五年一月一日から、――新築第一次の興行からは大入滿員を續けて來ました。文樂座が御靈にあつた頃は。越路の引退後、實に寂寥たるものがあつた。卽ち大正十一年二月に、「兩面鑑」の大文字屋を越路が語つた以來、實は文樂座は氣息奄々たるものがあつたのです。それはその三月に、「菅原」の寺小屋を語る筈の越路が、初日前に休場を發表し、源太夫が代役をしました。卽ち越路の舞臺は大正

十一年二月の「大文字屋」が名殘であつた。或る意味において、人形淨るりは、實はこの大正十一年二月を以て一段落を告げたと見る事が出來るとまで端的に言ひ切る事が出來る。その後の文樂座は、實は三百年の歴史の餘勢です。古川に水が絶えないといふ格です。

それ以來、時には消長は勿論ありますが、すつと御靈地内の文樂座は振はなかつた。强弩でも、その末はへろ〳〵矢、やう〳〵餘命を繼いでゐたに過ぎない。そこへ加へて大正十五年十一月興行に「法然上人惠月影」といふ駄作の新物がかゝつて打揚げた翌日に根城の文樂座が燒失したのです。内容において既に陵遲の極にあつた人形淨るりは、この根城の燒失といふ外形的の打擊を蒙つて、實はべちやんこに逝つてしまつた形です。この御靈の根城を燒いた事は、人形淨るりにとつて下された大きな鐵槌でした。

その假宅興行の辨天座の文樂座は、實に慘澹たるものであつた。藝術的にも、興行的にもです。

私は語る太夫遣ふ人形の心持ちの緊張を味はんがために、いつも文樂座の初日を見物する事を續けて來ました。幾年かのこの長い間の初日を見、聽きつゞけて來たのです。そのうちで辨天座の假宅興行の時は、兩棧敷を通じて唯つた一人の私のみを、棧敷に見出すことが屢々あつたのです。

樂屋のある者は、樂屋入りする事が恐ろしい。無人の見物席を相手に舞臺に氣が入りませんと、よく

こぼしてゐました。けふも又百人足らずのお客の前に、伽藍とした小屋で働くのかと思ふと、行末が闇です。と、よく愚痴をいつてゐました。

本書の大部分は、この文樂座の沈落時代に私が多く語つたのです。その前途が眞暗なのみでなく、その日、その月が危まれた悲境の文樂座の現在に卽して、「概論」的の筆を進めて來ました。或は「人形淨るり入門」を書きつゞけて來たのでした。が、昭和五年一月以來の新築の文樂座は、興行的には可なりの成績を擧げてゐます。そして幕内の誰彼はこの景氣に瞠目しながらも、大阪の人口を二百萬人としても、幾年かの大入滿員は、必定だから、さう悲觀したものでない——と急に元氣づいて來ました。

そして、別項の「人形芝居の研究」の内で、私が仕打の白井松次郎氏が、文樂座の總稽古を唯の一度も覗いた事すらないと申して、元文樂芝居の植村文樂翁夫妻の鑑識が、太夫三味線人形の藝の目安となつてゐた事を記して、松竹當事者の冷淡を痛論しましたが、昭和四年の暮——卽ち明けて正月に、新文樂座の蓋を開けるといふ前には、松竹の總帥白井氏が總稽古に立會つた事實を初めて見て、私は異例とした。文樂座の總稽古に今日まであるまじき新風景を見たのでしたが、とにかく容れ物小屋の新築とともに幕内、表方の心持がガラリと變つたやうでした。

そんなこんなで文樂座は、攝津大掾全盛當時を偲ぶほど、客が詰めかけた。そして一月から六月まで

昭和五年の上半期を大入滿員をまづ續けたのです。

これで人形淨るりは復活甦生したものでせうか。

何が原因で、こんな結果を來たしたのか？　少しこの昭和五年上半期の文樂座を考察することが、人形淨るりの將來を卜する一つの見方となると、私は思ふので、舊稿を蒐めて人形淨るりの"INTRODUCTION"の校正を終つた今、この一文を添付しておく所以なのです。

元來新築文樂座が、蓋を開けようとする、昭和四年末に、重なる太夫と三味線人形を招き、新築の劇場内を案内した後、松竹側からは、紋下津太夫以下を集めて、新文樂座の營業方針として、

○年三回乃至四回の興行たる事。

○正月は人形芝居で明けるが、二月は不明である。三月には築地小劇場をかけるかも知れぬ。

○或は二月に女義太夫を狩集めて、人形入で播重席を再現する事も一法であると考へる。

○素人義太夫の大會をも、新築文樂座でやりたい。名前は「文樂座」だが要は、お前さん達の人形淨るり專用の小屋だと思つてもらつては困る。

といふ意味の訓示があつたのでした。この訓示は可なり太夫三味線人形の人々を、暗い心持に導いたも

のでした。中には文樂が流行ねば仕方がないが、女義太夫だけは、床に上つて貰ふことは傳統的に困るといふ議論が幕内で唱へられたのでしたが、紋下竹本津太夫は、默つて「女」問題についても口を開かないで暗い心持にます〳〵引込まれてゐたものゝやうでした。

丁度能舞臺における神聖を持するために「女」の催能を、その舞臺に嚴禁してゐる。それの如く貞享元年に竹本義太夫が戎橋の操座以來「女」を床に上さなかつた。人形淨るりの「床」に女人を上すことを可なりに重大視したのでした。

が、當時の文樂幕内の空氣は、これを一致協力して一蹴するだけの元氣さへも持たなかつたのです。

ところで、昭和四年の暮二十六日に、開場式を擧行し、演技番組として「壽式三番叟」を、吉田榮三吉田文五郎とで上演し、一萬のお客を招待しまして、正月元旦初日の蓋を開けると、日本國中の誰人も豫想しなかつた大入滿員で二月三日まで、三十四日といふ、攝津大操歿後に嘗つて見ざる興行日數の記錄を作つたのです。これで、幕内の女人上床の傳統的不滿も、何もかも一切鬼がついて、爾來この昭和五年の上半期を人形淨るりで打續けて來たのです。

恐らく何人も豫想しなかつた事象です。ところで、その原因は那邊にあるか檢討を續けてみると、略次の七つの原因を摘出してこれに歸することが出來ると思ふのです。

一、「小屋見物」といふ、大阪の珍しいもの見たやの殺到。
二、御靈の地内の隅つこにあつて、物皆日に新たなる時世に取殘されて、入場機會を逸しさせてしまつたのを新築で入場の機會を與へた事。
三、御靈の地内から四ツ橋といふ街頭に出て、しかも椅子席で、場取りに困難がなく、同行者がなくて、一人でも簡易に行けるやうになつた事。
四、東京大阪を初め、若い人に「偶人劇」として可なりに興味が——氣まぐれ式だらうが——とにかく湧いて來た氣運が、こゝ一二年著しく目立つた潮先に乘れた事。
五、見物して見ると、案外「人形」が面白い。人形が巧緻だといふ事に、豫想外興味が惹かれた事。
六、新國劇の樹立を見ない今日、餘りに純寫實の演劇、或はダシ殼のやうな歌舞伎劇につくづくと愛想が盡きて、國民性の根蔕から、或は傳統的に、反動的に人形芝居の「方が」面白いといふ「方が」まだしもだといふ觀客層を、新たに人形淨るりが築きつゝある事。
七、所謂、追善、襲名の「事件興行」を茲許連發してゐる事。

などが、この上半期の興行的の好成績を與へたのであると見ていゝのです。

ところで、第六の項目について少し説明を加へておきたいと思ひますが、大阪の劇壇が、松竹の手に

獨占されて以來、道頓堀の色彩が極めて單調になつた。大歌舞伎を決して二軒、軒を並ぶ事を許さない。二軒の歌舞伎があると、一つは附隨的に、且つ優人の驅持出演を行うて、決して競演の形を採らない。何れも松竹身内の俳優だとすると、何れに疵が付いても困るといふのが、その主旨らしい。そして雁治郎偏重、「雁治郎システム」の大阪歌舞伎に、賦された大阪の觀客は、もう實に雁治郎に食傷してゐるのです。その食傷した料理を、無理無體に勸められてゐるのが、今日の道頓堀の情景であります。そしてその大歌舞伎の觀劇料は、大抵七圓が標準でありますから。一般の大阪の觀客――一般の家庭と大歌舞伎とは沒交渉である。この大阪といふ大都市に歌舞伎が、かういふ狀態にあると、外に見るべき芝居らしい芝居があるかといふと茲二三年は、五郎、淡海、十吾の喜劇か、然らざれば低級なる劍劇程度に今尙低迷してゐる「新聲劇」しかないのです。――されば前揭の七つの理由によつて人形芝居を見た觀客が、まだしも偶人劇に興味を感じてこゝ許上半期に上々の興行的の成績を、文樂座が收め得たのです。

平たくいふと、他の大阪の芝居が餘りに面白くないから、餘りに時世離れがしてゐるので、寧ろ時世を超越した人形に、反動的に走つたのです。別に不思議でも何んでもない。

ところで、問題はこの上半期の文樂座の成績が續くものか、どうか。人形芝居がほんとに復活したの

かどうか。今一歩進んで檢討の必要があります。

その前に、この六回興行のうちで、五月までの五回興行日數を調べてみると、次の如くである。

興行月	初日	打上日	興行日數
一月	一日	二月三日	三十四日
二月	七日	三月二日	二十四日
三月	六日	四月六日	三十二日
四月	十日	四月二十九日	二十日
五月	三日	六月一日	三十日

といふ成績でありますが、五月興行になると、興行師の常として、六月一日が恰も朔日と日曜とが重なつた上に、端午の節句である事を豫想して、ほんとは客足は、五月二十六七日で杜絶えたのを、無理無體に六月一日といふ三重紋日まで引延ばしてゐます。で、右の成績に見るも、一月から段々と落ちて來る。一月二月三月は事實滿員、普通の料金を出して七八時間の長い時間を壁に沿うて宮守のやうに、立續けて見物してゐたお客を私は目擊してゐるのです。これについて面白い挿話があります。

一月興行の或る日、松竹の白井氏が、文樂座へ入つて來ました。白井といふ人は大入滿員の芝居には

日に幾度ともなく巡視に來ますが、不入の芝居だと、滅多に來ないといふのがその性格の現れの一つです。六月(昭和五年)の中座の雁治郎の「いろは新助」魁車の「政岡」などは、初日に見た限りだといひます。以てその不入を察することが出來る。が、一月の文樂座は補助椅子を置いても〳〵、おき切れない。後ろの方で二三十人のお客が立つてゐるのを見て白井氏は、文樂座の主任を呼んで、この立つてるお客はどうしたんです。不入の時はいゝが、これは困ります。——と鼻の下の髭を搔きながらいふのです。主任は解せぬ顏。——白井氏の意は、「只」のお客をかう大入の時に入れては困るといふのです。やうやうその意を解した主任が、立つてるお客さんは席のないのを承知で無理に入場されたので、立つてゐても、特等の三圓を頂戴してをります。——と辯ずると、「ホヽ、それなら大事にせならんお客さんだす」と、心持の一轉がその眼色に見えたといふ一つ話です。その性格が躍如としてゐる面白い挿話です。

こんな大入は、第一項の「小屋見物」の殺到客です。これが薄らぐとお客も落着いて來る。四月五月は大入といふものゝ、土間椅子席の後ろ一筋二筋が淋しくなります。

問題はこゝにあります。

私は興行的の文樂座をのみ語りましたが、藝術的——といはうか舞臺の新興文樂は何うなのか。辨天

座に不入をつゞけた文樂座の內容が、四ッ橋移轉とともに、急に改善、興隆を見る筈がないが、それはとうなのか？　こゝが問題だ。

茲で注意を要するのは、人形淨るりは、騷々（ざわく）した道頓堀では興行は駄目です。辨天座へ燒出されての第一、第二興行あたりまでの辨天座には、相當の入を見た。御靈の末期よりは、辨天座が好成績であつたのです。——年代をいふと、昭和二年正月、二月などがさうです。盛り場だけに「切見」——立見が賑つたのですが、これはほんの束の間の人氣でした。竹本義太夫が筑後の芝居、若太夫の豐竹座も道頓堀ぢやないかといはれる人もあるかも知れぬが、その頃の道頓堀と今日とでは大變な相違です。されば後には竹豐兩座とも——外の理由もありますが——退轉衰微して、堀江の芝居に人形淨るりの命脈を繫いだのでした。そして後には博勞町の稻荷の社地、或は御靈の社地など、周圍が靜かなところでなくては人形淨るりは發達しない。古來人形淨るりの「南の常興行」——卽ち道頓堀常興行は、その道の人には經驗上匙を投げられてゐたのです。この意味からして四ッ橋への移轉は、前揭の七原因へ、更らにこの理由を加へて八原因としてもいゝ。場所が一つの繁榮の原因を爲してゐるのです。

ところで、四ッ橋へ移轉以來、稍々語り物の範圍が擴大されました。正月の眞先の興行において豐竹古靱太夫が、近松の「平家女護島」の「鬼界ヶ島」を四十年ぶりで復活上演した。そして廢曲の復活を完

全に實行した事。五月興行に「平假名盛衰記」の神崎揚屋が珍らしく出た事などは特記すべき語り物の範圍に擴大された一例です。

然し、興行時間が三時間演、十時打出しの七時間と短縮されたがために、――一般の興行時間として短いといふのでなく、寧ろ長い方でせうが、人形淨るりとして七時間を標準にしてゐては、「立てる狂言」――即ち通し狂言が上演出來ない。出來ないのでなくして、津太夫、土佐太夫、古靱太夫といふ三人に各自一時間乃至一時間半を與へてゐては、他の若手太夫に語らす時間がない。その結果は自然若手の中堅を一束にして掛合で終らしてゐるのです。

この事は、通し狂言がないから、各段の語り口、各段の淨るりの變化を失ひ、各太夫の修業の道を杜絶することになる。そして掛合で一口か二口――が口も利けないやうな役割が頻々としてあるのです。三味線の方になると、ツレ彈で有り餘る三味線彈をはかしてゐるから、一興行三四日しか出演しないといふやうな結果を生む。それが尙上の部で役付のないものが、この外に數十人を數へるといふのだから堪らない。人の過剩は餘儀ないとしても、若手の有望な太夫三味線彈の稽古舞臺がない事は、依然として變りがない。これに對して松竹の當時者は殆んど風馬牛で、今日あつて明日の事を知らない。今月はあつても來月の成竹がないといふやり方が、文樂座の有樣です。これで重だちたる三太夫が引退或は百

年の後は、人形淨るりをどうするつもりか、恐らくそれは考へたこともあるまい。――これが文樂座の現狀。興行師冥利にも、藝術的の良心のないのが、松竹の文樂に對するやり方です。

そして掛合の愚劣は、彌々出でていよ〳〵無茶を働く、文樂に淨るりを知るものがない事を證據立てゝゐるのです。例へば大隅太夫をして「壺坂」を語らしめ、或は「野崎」を語らしめて評判を惡くし、大隅太夫を殺してゐます。狂言を選んで、太夫の咽と太夫の柄とを考慮に入れる事を忘れてゐるといふのですから、藝術的にはいよ〳〵墮落するばかりです。そして後進の途を塞いでゐるのですから、人形淨るりの前途を思ふ場合、寒心に堪へないのです。

そして松竹の當事者は時間の不足に困じた末、六月興行において、前狂言の「廿四孝」の三段目を、「勘助住家」と「勘助物語」との二つに分けてゐます。四段目の「十種香」を「狐火」を引離なして太夫を二人にしてゐます。又「伊賀越」の「沼津」を「沼津」と「平作內」との二つに分けてゐます。かうしてやう〳〵時間の調節を計つてゐるのです。

元來この三段目四段目の語り場で、二つ乃至三つに切れるものは、切つて語らし、この餘分の時間を若手の太夫に與へよといふ、こん度の狂言の立て方は、私が昭和二年十月に「演藝畫報」及び「大阪每日新聞」の紙上で論じたのでしたが、その當時――三年前には、誰もが耳を傾けないで、「何を素人が無

茶をいふ」といふ位の考へで迎へたのです。太夫連は頭から不可能事として聽かうとはせず、仕打の白井氏の如きは、「演藝畫報」の同年十一月において、私のこの說を捉へて、えたり賢こしとして、白井松次郎と署名して、

これは殆んど太夫を殺してしまふものです。幼少の頃から多年の修業を積んでやつと一人前にならうとする樂しみは、一段を語り終せたいがための修業であります。たとへ一時間何十分また二時間に及ばうとも叮嚀に語り終せるところが文樂座の太夫としての特權であるかぎり、これは斷じてつぶされません。（「人形淨るり經營について」參照）

と書いてゐます。この本末を知らぬ太夫に阿り媚びてゐる愚論を私が反駁しようと存じた。――その十一月八日の朝に、私は輕微ながらも、腦溢血のために世間から遠ざかり、二ヶ月を病床に靜養を續けねばならぬ事となり、續いて今日尙、病を故山に養うてゐるのです。從つてたうとうこの反駁に對する反駁が世に出る機會を失つたのでしたが、今月今日、事實が私に勝利を齎らしたのです。「文樂座の太夫の特權」だと呼號してゐます白井氏は、一段を事實においてこゝに分けてゐるです。こんな事を三年前に雜誌に公言した事を忘れたかのやうに、この「特權は斷じてつぶされません」といつたのを見事裏切つてゐます。――三年前から當然分つてある事です。三年前に私の說を嗤笑した人々の顏を、私は只今

ニヤリと笑つて見返へしてゐるのです。立派に一段を一段として語り終せる太夫の輩出するまで、何を苦しんで、一段を一人で語らねばならぬのか分りません。この結果を見たのは時間の問題でなく太夫の非力を證據立てるものです。

尤も淨るり道始まつて以來、この一段を分つて語るといふ事は嘗てない事です。主義として分つて語る事は斯道未曾有の事です。

但し「廿四孝」の三段目を、昭和二年三月に、竹本源太夫と叶太夫とで、六月興行の如く分けて語つてゐますが、滅多にない事例です。

滅多にない事を今日何故行はねばならぬか、松竹の當事者が、堂々と世間に公言した「斷じてつぶせません」といふ制度を今日潰して平然たる所以はどこにあるのですか？　進んで、この點を考究すると今日の文樂座のお客は前掲の七つ乃至八つの理由によつて、文樂の椅子によつてゐる。だから御靈の文樂座時代とは、ガラリと觀客層が異つて來ました。新たなる觀客層は實は淨るりを聽く耳はまづありません。淨るりの善惡を翫味鑑賞する能力と豫備知識とを缺いてゐるのが最多數です。――その證據に詰らぬ節、聽きどころでもないところに拍手、或は歡呼の聲を發してゐます。少し淨るりを聽く耳を持つてゐるものから見ると、半間な褒め方を敢てしてゐます。これは節或は詞のいゝところ、褒むべきとこ

ろを褒めてゐるのでなくして、「人形の惡戯」に拍手し、喝采を惜しまないのです。こんな觀客層が新たなる文樂座の大多數ですから、實は淨るりはどうでもいゝ、寧ろ「人形」の舞臺に引つけられてゐるお客なのです。人形の方だと、眼に訴へるのですから、カラ素人の目でも、或る程度の鑑賞と批評とはまづ出來る。淨るりの善惡は分らないが、人形は解る。豫備知識を絶對に必要とする淨るりは、意味さへ解ればいゝ、映畫の說明者位に思つてゐる。されば三味線の善惡など固より知らず、意味を聽かうとする淨るり文句の邪魔にこそなれ必要としないといふ風なのが、今日の文樂座のお客なのです。

これを稱して私は「人形偏重時代」の觀客層といひ、この時代を誘致したのは、半面太夫の非力、上手の太夫がなくなつたがためだと思ひ、その責の半ばは太夫が負はねばならぬものだと考へます。そして殘りの半は「時世」が然らしめてゐるのです。

理論の上からいふと、本書で度々私が論じたやうに、淨るり、三味線、人形の三業が一線上に立つ、三輪車のやうなもので、どの一輪を缺いても、又一線上から他の線上に移つてもならぬといふのですが三業の各業に大天才が現はるゝと、その一業が主となる。近い話が、三代目長門太夫以來、五代目春太夫、攝津大掾を經て何んとしても、立派な太夫が輩出したから太夫偏重時代を現出したのですが、越路太夫の歿後は、とみに人形偏重の傾向を示し、新文樂座の建設とともに、その傾向が一月々々助長され

て來ました。されば長い間人形部屋總數二十七人で絶對に人形遣ひが殖えなかつたのが、今日（昭和五年六月）現在では三十一人を數へてゐます。そして舞臺の上においても、正月興行の榮三文五郎の「三番叟」二月興行の榮三の「勸進帳」の辨慶、五月の與次郎など人形にとみに活氣を呈して來ました。これは抗すべからざる「時」の力です。

そして、衣裳が特によくなり、舞臺の大道具に注意が行屆いて來ました。只大道具がます〳〵愚かなる寫實的な傾向にあるのは注意を要すべきですが、正面襖の裳に貧乏隱しの工風が出來たり、黑子の紐も全部黑色に一定されたなど、着々改良の實が見えて來ましたのは、喜ぶべき事であるが、四月興行の「大江山」――「戾橋」に、綱の人形を身體に結へて人形遣ひ自らが芝居をしてゐるのは、俗惡趣味です。人形部屋の人々が確乎として、何故文樂の人形が尊ぶべき藝術であるか――といふ點を探り足でなくて人形部屋全部の人がほんとうに知らねばなりませぬ。人形の藝術の尊さを人形遣ひ自らが知ると、こんな「大江山」のやうな人形舞臺は氣恥かしくて演じられるものでない。こゝに至らねばウソです。人形部屋における一等大切な事はこの一事です。四月の「戾橋」を見るにつけて、人形遣ひの養成よりも何よりも、自分の藝の貴さをほんとに理解する事が、今日の緊急事ぢやあるまいか。――と私は考へられた。この意味からしても、私の言ふ人形淨るりの博物館的保存の緊急事たる事が、お解りになると思ひ

ます。

ところで、文樂座の當事者は、この一月(昭和五年)の興行の時に、日曜日の晝間興行を行ひ、女學生のためにマチネーとして試みました。本興行の土佐太夫の「先代萩」の御殿を、駒太夫をして語らしめ犧牲的精神の政岡を、女學生に見せて、思想涵養、國粹保存、「忠義」教育の一助としてマチネーを行つたのです。このマチネーが相當——大阪府の學務課との聯絡などがあつて、效果を收めたといふ事です。若い家庭的の女に淨るりを親炙せしめた效果があつた。——頭から解らぬものだと考慮にも入れなかつた若い女學生でも、長丁場の御殿を傾聽したから淨るりの壽命はまだ〳〵長へにある。忠君愛國の思想傳導に淨るりは好個な藝術だといふのが幕内一部の考へのやうです。

この話を聽いて、私は全然反對の意見を持ち、幕内の當事者がそんな心得でゐる事に暗然としたのです。これも矢ッ張前述の人形遣ひが、自分の藝の尊さを知らぬが如く、太夫も亦藝術的には全く理解がないものだ、こんな誤れる考へが文樂座内にある事を情なく思つたのです。

忠君愛國の思想傳導の具に、成らうが、なるまいが淨るりの本質には無關係の事である。が、内部の人が、淨るりの本質を離れて、「忠君愛國」をたよりにする事は、當事者の内心に——或はその識域下の

考慮に「忠君愛國」によつて、淨るりを聽かさうと期待を持つに至つたことを說明するもので、卽ち藝術的の獨立が、失はれようとする考へ方です。甘い羊羹でいゝものを、それが多食すると胃腸を害してもうまい羊羹でいゝものを、カルヽスせんべいだ、衞生向きの菓子ですといふ、うまい水飴でいゝものを淺田飴だとして人に勸めようとする根性が、藝術の獨立を冒してゐるものです。マチネーが惡いといふのでなく、さうさせた心持が――「忠君愛國」を淨るりの賣物にし、淨るりの必然的の屬性（アツトリビユート）でもないものを賣物にせねばならぬところに、淨るりの壽命の影の薄さを示してゐます。當事者の心すべきはこゝにあると思ふ。藝術を藝術として立てない蝕ばんだ心は、速かに外科手術を行つて、傳統的の精神による藝術にのみ精進すべきです。恰度近松の淨るりを褒めるに事缺いて、近松を皇室中心主義者だなどいふ亞流と同轍。人形淨るりの藝術的傳統の精神は、もつと〳〵根蔕が深い事を、太夫も三味線も知らねばなりませぬ。前述の人形遣ひの自覺とともに、その業者の正統なる自覺から生るゝ人形淨るりの博物館的保存が、今日の急務なのです。

終りに臨んで、近來東京の義太夫界にあつて、太夫三味線が、芝居入りをする、卽ち本行を離れてチヨボ語りになる人が續出してゐるやうです。古くは豐竹巖太夫、三味線吉作、竹本米太夫などが芝居入

をしてゐます。――これはその人の生活上の條件が伴うてゐる事ですから他人が容喙すべきでないでせうが、何故、本行の太夫三味線の芝居入りが古來禁止されてゐたか、何故嚴しい申合せがあつたのであるか取調べて見ると、――

昔の太夫三味線に芝居入を禁じたのは、技藝の上よりは寧ろ國民としての身分の上からであつたらしい。卽ち別項「太夫三味彈の住居と河原者」に引用した如く、四代目長門太夫の手記によると、

首振出勤差止の事

といふ一條があつて、その文言によると、

前々より歌舞伎役者と同座にて首振と唱へ出勤致候方も有之然る處天保十五年寅五月御改格(革)の節より役者衆中は道頓堀八丁に住居相極り候得共我々共におゐては不相變市中住居にて渡世致候事は差別有之候故也然る上は此後右首振等え出勤致候ては終にはチョボ語り同樣に可相成哉も斗がたく然る時は先祖師達えの不忠且は因講內の不外聞にも相成候間以來右首振狂言へ出勤の儀は決して不相成……

とある。この記錄に年月の記載はないのですが、前後の記事から推して弘化四年の申合せのやうです。これでみると、首振芝居でも、昔は因講は嚴禁してゐたので、その理由は「河原者」の住居限定の身分

と、太夫三味線彈は河原者と伍してはならぬといふのが第一の禁止の理由らしく思はれます。

河原者に對する、この差別待遇は、今日ではもう問題でないから、今日の因講は、首振への出勤は禁止してゐません。然し本行とチョボとの限界にはしかと一線を劃してゐます。が、一線を飛越えて、生活のためにチョボに赴く人のあるのは、個人の自由でせうが、その業者にして本行の太夫がチョボ語りになつて、何故惡いか——などといつてゐる人があるのに驚く。本行の淨るりで、俳優が動けない事は言ふまでもない事、この場合俳優が動けるやうに淨るりを崩して語らねばならぬ。その淨るりを崩すことが惡いといふのが、今日の淨るり本業でチョボ語りになる事を嚴禁してゐるのです。言葉を變へていふと、人形の藝と歌舞伎の藝との異つた點がこゝにあるのです。こゝの一點を忘れて芝居入りが何故惡いかなどといふ横紙破りの理窟をいふ人が淨るりの太夫に出て來ようといふのですから、東京の義太夫は到底お話にはなりません。——卽ちその原因は淨るりをほんとに聽く人の支持が、東京にはないといふ事を證據立てゝゐます。

これを一言附加して、人形芝居の項の終りとします。（昭和五年六月十四日）